WEO《ワールド・エンド・オンライン》

たちまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＷＥＯ（ワールド・エンド・オンライン）

【Ｎコード】
Ｎ４５９０Ｙ

【作者名】
たちまる

【あらすじ】
世界的ＭＭＯＲＰＧ《マッシブリー・マルチプレイヤー（マルチウェポン）・オンライン・ロール・プレイング・ゲーム》であるＷＥＯ（ワールド・エンド・オンライン）に一人の錬装士が返り立つ。
一年前に無くしたものを取り返すため、もう二度と過ちを繰り返さないため、彼は新しい力を手にすることが出来るのか。
現実（リアル）と仮想（バーチャル）が交差する時、真実が開かれる。

WEO《ワールド・エンド・オンライン》（前書き）

どうも、たちまるです。
この物語はフィクションです。
どこかで見たことあるようなぁ設定だなぁと思ってもそれは気のせいです。
きっと気のせいです。
たぶん気のせい・・・・・です。

WEO《ワールド・エンド・オンライン》

神谷暮都（かみやくれと）は、自分のマシンの電源をつけた。神谷がやっているオンラインゲームWEO（ワールド・エンド・オンライン）は、3年前に発表された次世代MMORPGの中でも最高峰と言われるグラフィックに新しいシステムを導入した最近の中で最も熱いオンラインゲームだ。

世界規模で展開され、今やWEO（ワールド・エンド・オンライン）をプレイ出来ない国は無いと言われるまでになった。

国ごとにサーバー（以降『鯖』と呼ばれる）が分かれているわけではなく、独自の翻訳プログラムで言語はWEO（ワールド・エンド・オンライン）の共通言語であるアルウェン語に統一され、もはやゲーム内では国という垣根は取り払われた。

神谷が特に気に入っているのは、WEO（ワールド・エンド・オンライン）がPCのレベルを上げていくゲームではないという点とWEO（ワールド・エンド・オンライン）と同時に発売されたRVM（リアル・バーチャル・マスク）によって今までのオンラインゲームとは一線を画したリアルさを体験できるところだ。

WEO（ワールド・エンド・オンライン）が発表された当時、神谷はクローズドβテストからオープンβテストなどの全てのテストに参加した。正式にゲームが運営されるようになっても徹夜を繰り返しいつの間にか廃人プレイヤー（重度のオンラインゲーム中毒者）の一員となっていた。

（あれから一年か・・・・・・）

神谷はとある理由で一年前にこのゲームを引退していた。

（やっぱり手がかりはこのゲームの中にしかない・・・・・・）

ゲームが起動し、WEO（ワールド・エンド・オンライン）の世界の光景が広がると同時に意識は電脳世界へと沈んでいった。

†

クロードがゆっくりと目蓋を開くと目の前には幻想的な光景が広が

っていた。
一年ぶりのＷＥＯ（ワールド・エンド・オンライン）の世界。
クロード（神谷暮都のメインキャラ）は、交易都市カリウェルのワープゲートの前に立っていた。
交易都市カリウェルは、その名の通り商売が発達している都市だ。
高層ビルが立ち並び、道には露店が数多く並んでいる。周りは海に囲まれ港にはいくつも船が停まっている。
多くの商人がこの都市を利用している。理由はいくつかあるが、一番はこの都市はほとんど関税がかからないというところだろう。あとこの都市は交通の便がとても良い。
クロードが見つめる先には大型の飛空挺が忙しそうに飛び交っていた。
（久しぶりだな）
一年しか離れていなかったのに、もう何十年も離れていたように感じる。
自分の胸に甘い疼痛が広がるのをクロードは感じた。
この体を動かすのも一年ぶりだが、意外とスムーズに動いている。
（戦闘は流石に勘を取り戻さないといけないだろうな）
クロードは、いくつもの武器を操ることが出来るジョブである『錬装士（マルチウェポン）』だ。
その特性からあらゆる武器を使うことが出来るとされているが、実際は操作難易度が特化職に対して段違いに高く、一般的には弱職とされている。
あらゆるところに生えている棘が特徴的な漆黒の鎧を身に着けている姿は、孤高の戦士といった出で立ちだ。
（これからどうするかな）
とにかく、今は情報収集が先決だ。目的を果たすためには、闇雲に動いてもしょうがない。
とりあえず掲示板をチェックしようということで、クロードは交易都市の中央区の広場に訪れた。

流石に交易都市の中央区ともなると、人通りが激しい。
広場にも露店が置かれ、様々なアイテムや武器防具が所狭しと並べられている。
クロードも何回も露店にはお世話になったことがある。特に交易都市の露店は他の都市と比べても質が高く値段も安い。
そして交易都市の近隣には、出現率が低いモンスターが沸く箇所が何箇所か存在していて滅多に拝むことが出来ないレアドロップアイテムなどの掘り出し物を見つけることが出来る。
人混みを避けつつもゆっくりと進み、やっとの思いでクロードは中央区の中央に設置されている掲示板にたどり着いた。
各都市に何個か設置されているこの掲示板は、都市や近隣のダンジョンの情報について色んな人が書き込みを加えているため情報の宝庫だ。
クロードが今知りたいのは、行方不明者や正体不明のモンスター、そしてＰＫ（プレイヤーキラー）についての情報だ。
キーワードを打ち込み、検索をかける。次々と表示される情報にクロードは目を凝らした。
一番ヒットしたのはＰＫ（プレイヤーキラー）についての情報だった。次に正体不明のモンスター、最後に行方不明者。
ＰＫ（プレイヤーキラー）というのは、他のＰＣを襲い装備しているアイテムを奪ったり手持ちのゴールドを奪う輩のことだ。通常のＰＣはノーマルネーム、誰か一人をキルした場合そのＰＣはイエローネームへと変わる。イエローネームになったＰＣは、誰かにキルされた場合に通常より重いデスペナルティが課される。
そして、多くのＰＣをキルしたＰＣはイエローネームからレッドネームへと変わり、誰かをキルした場合必ずその相手が装備しているアイテムを奪う代わりに、レッドネームがキルされた場合、ＰＣがデリートされるというデスペナルティが課される。
そのため、必然的にイエローネームは多いがレッドネームの数は少ない。

掲示板には、そのレッドネームの情報がいくつか掲載されていた。
その中にいくつか見知った名前を見つけてクロードは懐かしい気持ちになる。
次の正体不明のモンスターだが、正直信憑性にかける情報ばかりだった。だいたいが、既に発見されているモンスターだが、遭遇した相手がまだ知らなかっただけというパターンが多い。ＷＥＯの世界には何万種類ものモンスターが存在しているため、新種と勘違いされることが多いのだ。
行方不明者の情報でクロードの目は止まった。
数は少ないが行方不明者というのは確かに存在しているようだ。
一番新しい情報で信憑性のありそうなものは、遺跡ダンジョンに潜ったペアがそのまま帰ってこずに、ゲームにもインしなくなったというものだ。これについては何人もの証言があり、信頼できそうな情報だ。
（やはり、一年前の事件と関係があるのか？・・・・・・）
これから、どうするか。行方不明者が出たという遺跡ダンジョンに行ってみるか。
クロードが思案にくれていると、不意にピピピッという音が鳴り響いた。
（なんだ？）
システム画面を開いてチェックすると一通の匿名メールが届いていた。
明らかに普通ではないメールにクロードの警戒心は高まったが、メールのある一文を見て血相を変えた。
（一年前の・・・・・・再現・・・・・・だと）
いつの間にかクロードは走り出していた。
一体何が起こっているのか、何もわからない。
ただ一つだけ言えることがあるとすれば。
「一年前の過ちは繰り返さない」

一年間停滞していたＷＥＯ（ワールド・エンド・オンライン）の世界が今再び胎動を始める。

WEO《ワールド・エンド・オンライン》（後書き）

たちまるです。
出来るだけ続編を書いていきたいと思いますが、人気なかったら続編はないかもしれません。
そこだけはすいません。
誰も読んでくれないと寂しいもの・・・・・・。

邂逅《chance meeting》

（メールの内容通りなら確かこの辺りのはずだ・・・・・）
クロードは、ジャングルのような森の中へと来ていた。
最近実装されたらしい新型のダンジョンらしく、廃人プレイヤーだったクロードも見覚えがないダンジョンだ。
（一年でずいぶんと変わったな）
うっそうと茂った木々が日の光を遮り、森の中は薄暗く先が見通せない。
時折モンスターの声か環境音かわからない甲高い鳴き声が辺りに響き、クロードを驚かせた。
一応ダンジョンという形なので、道らしきものはあるのだが、舗装されているはずもなく獣道が続いている。
少し進むと、クロードはモンスターとエンカウントした。
狼のような小型のモンスターだ。
「ブレード装備（インストール）『雷光』」
音声入力による装備換装スキルを発動。
クロードは、空に手をかざし武器を呼び寄せる。
持ち上げた右手に光り輝くエフェクトと共に片手剣が装備（インストール）される。
雷撃属性を持つ片手剣『雷光』は、刃渡り６０ｃｍほど、小型モンスターを相手に戦うにはちょうどいい長さだ。
片手剣を下段に構え、クロードは息を押し殺した。
モンスターとの戦闘の基本は相手の行動パターンを覚えることであるが、ＷＥＯではそれでは通用しないことが多い。
なぜなら、モンスターはランクが上がるほど優秀なＡＩを搭載し、不規則な攻撃を繰り出すようになるからだ。
目の前のモンスターは小型といえど、油断は出来ない。
しかし、一年間のブランクがどれほどか、試すにはちょうどいい機会だ。

ギギギィイイイイ
目の前の獣が動く。耳を切り裂くような咆哮。
後ろ足をバネのように伸縮させた突進。
牙による一撃必殺の攻撃――――
クロードは真っ直ぐに突っ込んできた獣の牙を左に大きく避けてすれ違いざまに片手剣で相手を切り裂いた。
（浅い）
獣のライフバーは大きく削れていたが、一撃では仕留め損なった。
（やっぱり、ＰＳ（プレイヤースキル）が落ちているな）
一年前なら今の一瞬の攻防で確実に仕留めていた。一見すると大した差ではないように感じるかもしれないが、クロードにとってこの差は致命的なものだ。
（次は俺から仕掛ける）
傷を負った獣は、ダメージにより動きが鈍くなっている。仕留めるなら今だ。
「ブレードスキル『雷光蝶』セット、スキル『疾駆』発動」
駆け出す。
スキル『疾駆』によってクロードの移動速度は、１０秒間の間１．５倍加速――――
一瞬にして獣との距離を詰める。
「はぁあああああああっ」
片手剣を上段に構え振り下ろす――――
ブレードスキル『雷光蝶』によって片手剣『雷光』は紫電を撒き散らしながら獣に襲いかかる――――
ギィィィィィィィィ
攻撃力が高い『雷光蝶』のスキルによって獣は真っ二つに切り裂かれ、短い断末魔と共に弾け飛んだ。
死体が光の砂となって消えていく。
（久しぶりにしてはまぁまぁかな）
ＰＳ（プレイヤースキル）が落ちているのは仕方ないが、これなら予定より早く昔の勘を

取り戻せるかもしれない。
クロードはしばらく森の中を進んだ。
何度かモンスターとエンカウントしたが、全て撃破。
一時間ほどかけて、クロードはダンジョンの最深部へと到達していた。
薄暗かった森は、穏やかな木漏れ日が射し込み、緩やかな風が草木を揺する音が耳に心地よく響くようになっていた。
（ここまで、何も収穫なしか、やっぱりガセネタだったのか）
いっそもう帰ってしまおうか。
クロードがそう思いかけていた時だった。
左上に表示されていたマップに光点が浮かび上がった。
こんなところに他のプレイヤーか？
ちょうどダンジョンの終わり、帰還用のワープゲートが設置されている場所だ。
多くのダンジョンの最深部には、ボスモンスターと呼ばれる通常のモンスターより遥かに強力なモンスターがいる。
光点はちょうどそんなボスモンスターが存在している場所を差していた。
しかし、光点は一つしかない。
（誰かが、一人でボスと戦っているのか）
ボスモンスターは、パーティ推奨のモンスターだ。
ソロで挑むには、それなりのＰＳが必要となってくる。
（どんな奴か、見物するのも悪くない）
このまま帰ってしまうのも味気ないと思っていたところだ。
そのまま獣道を進むと、不意に森が途切れ、広場のような場所に出た。
ガアアアアアッ――――
目の前を覆い尽くすような巨体。
盛り上がる鉄のような筋肉。
頭の横に生えた２本の角。

（ラヴィアトルスの亜種かな）
巨人型の一般的なボスモンスターだ。山のような巨体と鋼のように堅い筋肉が特徴だが、外見と裏腹に俊敏性が高く、腰溜めの状態から放たれるショルダータックルは、直撃すればよほど防御能力を上げたスキル振りをしていない限り一撃で沈められる。
（それにしても、魔法使（ウィザード）いクラスがソロとは、ね）
山のようなボスの巨体に対し、対峙している魔法使（ウィザード）いの体はあまりにも華奢だ。
遠目からでも目を惹く赤く長い髪が印象的だった。
（お手並み拝見）
クロードが到着した頃には戦いは既に佳境に入っていた。
ボスの体には、火傷のような跡が見える、一部炭化しているところを見ると、魔法使（ウィザード）いは、高位の炎属性魔法（プロミネンス）使いなのかもしれない。
先に動いたのは、ボスモンスターだった。
巨体を深く沈め、腰と脚にに力を溜める。
右肘（みぎひじ）を胸の前に突き出した前傾姿勢。
ラヴィアトルス種が得意とする、ショルダータックル型のスキル『アンパイア』――――
魔法使（ウィザード）いクラスは、初期ステータスの防御力が総じて低いため、直撃した場合文字通りひとたまりも無いだろう。
魔法使（ウィザード）いはそれに対し――――
右手を軽く前に突き出しただけだった。
（まさか、受け止めるつもりか！？）
魔法使（ウィザード）いは、防御力が低い――――とはいえ、それは防御性能と同一ではない。
高性能な結界魔術を駆使すれば、驚異的な防御性能を発揮することもある。
（――――だけど）
どう見ても目の前の魔法使（ウィザード）いは、そんな高性能な防御系魔法を使えるとは思えなかった。

元々攻撃系統スキルと防御系統スキルは、両立させることが難しい。
高位スキルを取得するためのスキル（以降『前提スキルｏｒ前提』と呼ばれる）が全く違うためだ。
「スペル詠唱（キャスト）『炎夢』」
魔法使（ウィザード）いの指先から巨大で複雑な真紅の魔法陣が一瞬で展開される。
（やっぱり高位の炎属性魔法（プロミネンス）使いか、しかも強いな――――でも）
防御ではなく、攻撃。予想外だが、相手を仕留めきる自信があるなら、あながち間違っているとは言えない。むしろ最良の選択。しかし――――
（高位のマジックスペル『炎夢』は確かに強力なスペルだが、それじゃ――――）
足りないのだ。
ボスのライフは、見たところまだ3割以上残っている。
いくら、『炎夢』が強力なスペルでも一撃でボスのライフを3割削ることは出来ない。
（このままじゃ――――）
クロードの脳裏に、華奢な魔法使（ウィザード）いがボスの巨体に吹き飛ばされる最悪の光景が映し出される。
（加勢するしかないか）
クロードは武器を装備（インストール）しようと空に手をかざし――――
「手を出さないで」
魔法陣を展開した魔法使（ウィザード）いに止められた。
「でも、お前このままじゃやられちまうぞ」
「ふぅん優しいのね、私はてっきり横殴り（狩りしている途中に他のＰＣがモンスターに攻撃などをして経験地やドロップを奪う行為）かと思ったわ」
「なっ・・・・・・」
予想外の鋭い言葉にクロードは、たじろぐ。
「まぁこの私に、アンタの助けがいるかどうか、その目でじっくり確かめることね」

そう言って彼女は――――
「スペル詠唱(キャスト)『紅桜』」
先に展開された魔法陣にもう一枚の魔法陣が展開される。
（ダブルキャスト！？）
ダブルキャストとは、同時に二つのスペルを展開する高難易度のスキルだ。
WEO(ワールド・エンド・オンライン)において、スキルやスペルを発動するためには、MPの他にプレイヤー自身の集中力、精神力が必要となってくる。
ゲーム内MPとリアルMPがあるようなものだ。
一つのスキルを発動もしくは展開するだけでも、最初はままならない。
熟練者ですら、高位のスキルは安定して発動できないことがある。
（それなのに、こんな高位スキルを二つ同時に展開するなんて・・・・・）
正直、クロードは内心で舌を巻いた。
確かに、彼女には自分の助けなど必要なかったようだ。
炎属性魔法(プロミネンス)使いの少女は、クロードの反応を楽しむようにフフッと笑った。
「何を驚いているの、これからが本番よ」
そう言ってボスを睨み――――
「スペル詠唱(キャスト)『煉獄鬼(れんごくき)』」
三つ目の魔法陣が展開されるのと同時に――――
グオオオオオオオオオオッ
ボスモンスターの巨体がロケットのように飛び出す。
一瞬にして彼我の距離は縮まりそして――――
「爆死しろッ」
大爆発と共にクロードの視界は、真っ赤に染まった。

邂逅《ｃｈａｎｃｅ　ｍｅｅｔｉｎｇ》（後書き）

どうも、たちまるです。
少しでも読んで下さっている方がいらっしゃるようなので続編を書いていきたいと思います。
拙い文章ですが楽しんでいただけたら幸いです。

レッドネーム《Ｐｌａｙｅｒ　Ｋｉｌｌｅｒ》

爆風と閃光が通り過ぎ、焼かれた視力を取り戻したクロードが最初に見たのは、崩れ去るボスモンスターの姿だった。
三重に展開された高位攻撃魔法の圧倒的威力の前に、三割残っていたライフは、呆気なく消滅していた。
炎属性魔法（プロミネンス）使いの少女が最後に使った魔法を思い浮かべる。
トリプルキャスト――――
これを見たのは、二度目だ。
（シエラ以外に使える人がいるなんてな・・・・・・）
クロードは、少しの間、放心していたが――――
「はーなにこれ、ケチ臭いわねぇもっといいもの寄越（よこ）しなさいっての」
いきなり傍で聞こえてきた声にハッと現実に帰る。
立ち尽くしていた少女がぶつぶつと悪態をついていた。
どうやら、ボスドロップが良くなったらしい。
トリプルキャストを発動した時の神々しいまでの姿は今は無く、だらんと脱力して腕をぷらぷらさせている。
「それで――――アンタは、いつまで私のことを見つめているつもりなのかしら」
キラリ、とまるで猫のように目を光らせて、少女はクロードを睨（にら）みつけた。
そこでクロードは、初めて彼女を真正面から見つめた。
猫を連想させられるような、鋭い瞳。
ガラス細工のように透き通ったなめらかな肌。
嘘みたいに整った顔立ち。
そして、真紅のたなびく長い髪。スタイルは、胸が比較的薄いが、全体的にスラリとして文句のつけようがない。
かなりの美少女だ。

が、そこはゲームのキャラクターだけあって美男美女はさほど珍しくも無い。
クロード自身も、リアルの神谷暮都をベースにキャラメイクしてるとはいえ、些か以上に美化していることは否めない。
「もしかして、アンタＰＫ？それだったら相手になるわよ」
少女は、自身満々に微笑む。
相当自信があるのだろう。その笑みからは余裕が感じられた。
挑発的な炎属性魔法使いの少女の態度に、クロードは肩をすくめて、首を横に振る。
「まさか、さっきの戦いを見て君と戦いたいとは思わないよ、凄いな、トリプルキャストなんて」
「ふーん、私の凄さが理解るくらいは、ＷＥＯをやってるってことね」
「まぁ、それなりには」
「そう」
少女の瞳が悪戯を思いついた子供のように輝いているのに、クロードは気づいていなかった。
「面白いものも見せてもらったし、今日は帰らせてもらうよ」
シエラを探すための手がかりを得る為にここまできたが、空振りだった。
落胆は大きいが、最初から上手くいくとクロードも思ってはいない。
（もう一度、情報を整理しなおしてから探索をするしかない）
それじゃ、と手を上げてクロードは少女に背を向けて帰ろうとして
――――
少女が右腕を振り上げた。
「うん、さよなら――――スペル詠唱『紅桜』
（なっ――――！？）
いきなりの不意打ち。
展開とほぼ同時に発動した攻撃魔法に、クロードの反応は一瞬遅れる。

しかし――――
クロードは完璧に『紅桜』の特性を理解していた。
花びらのような独立した炎が敵に殺到する『紅桜』は、動くものに反応し襲い掛かる。
（その特性から『紅桜』は汎用性が高くて、使いやすい――――けど）
逆に言えば、『紅桜』は動かなければ、大した脅威ではない。
クロードは、その場から一歩も動かず、襲い掛かる炎をやり過ごした。
それでも、当然炎全てを避けられたわけではない。
クロードのライフバーは、1割弱削られていた。
「いきなり何するんだッ」
「何って、PKしようとしてんのよ、見てわからない？それとも、こういうのは初めてかしら」
少女はフフンと笑い、長い髪を掻き揚げる。
その時になって、やっとクロードは気づいた。
少女の名前、シンクレア――――
その名が赤く輝いていることに。
（こいつ、レッドネームプレイヤーかッ！？）
「ゴミドロップでムシャクシャしてんのよ、代わりにアンタを倒して装備をもらうことにするわ」
シンクレアは、ペロリと桜色の唇を舐めると朗々と音声入力を開始する。
「スペル詠唱『火炎九十九』
（速い）
展開された魔法陣から、飛び出した無数の火炎球が周囲を焼き尽くす。
クロードは、轟々（ごうごう）と燃え盛る草木からバックステップを駆使して距離を取った。
本来炎属性魔法使いなどの魔法使い《ウィザード》クラスは、ソロで戦うのに向いていない。

機動力と防御力の初期ステータスの値が低いからだ。
代わりに他職には少ない範囲攻撃や回復スキルなどの支援系統スキルを保持しており、パーティに一人でもいるとダンジョン攻略時に難易度がグッと低くなる。
だが、目の前の少女は――――
「双剣装備（デュアルオンリーストール）『空海』」
クロードは基本装備の片手剣から、双剣へと換装（ウェポンチェンジ）。
スキル『疾駆』を発動。
周りの木々を利用し縦横無尽に駆け回り火球を避ける、そして――――
（――――これでどうだっ）
シンクレアの頭上からの攻撃。
双剣をクロスさせて放つスキル『セイバー』
完璧なタイミング、二つの凶刃に倒れる真紅の姿をクロードは疑わなかった。
しかし、その予想は、はずれた。
シンクレアは、魔法使い《ウィザード》系クラスとは思えない動きを見せ迫り来る刃を華麗に避けたのだ。
交差する二人、クロードに突き出される左手、スキル硬直によって出来た一瞬の隙、しかしそれは、両者にとって永遠のような一瞬。
シンクレアは哂（わら）う。
「チェックメイト」
爆炎にクロードの体は包まれた。

レッドネーム《Ｐｌａｙｅｒ　Ｋｉｌｌｅｒ》（後書き）

どうも、たちまるです。
最近のオンラインゲームも、なかなかグラフィックは良くなっているんですが、どうにも一皮剥けない感じが強いんですよねぇ。
ＰＳＯ２に期待したいと思います。

取引《ｄｅａｌｉｎｇｓ》

（この瞬間を待っていた！）
条件は三つ。
五割を越えるダメージを受けること。
敵との距離、これは近ければ近いほどいい。
そして、相手が油断していること。
今、この一瞬だけそれらの条件は、満たされていた。
「装備スキル『爆裂反応装甲（リアクティブアーマー）』発動！」
クロードの音声入力と共に、体を包んでいた炎が凄まじい衝撃派に呑まれ四散する。
衝撃派に呑まれたのは、炎だけではない。
至近距離にいたシンクレアも当然の如く、衝撃をモロに受けていた。
不意を突かれたのだろう、その体勢は大きく崩れ、斜めに傾（かし）いでいる。
かなりのダメージを受けながらそれでも立っていられたのは、レッドネームとしての経験か。
『疾駆』による加速で勢いをつけたクロードは、右肩からの体当たりを喰らわせ体勢を立て直そうとしていた少女にトドメを刺す。
ドサリ、という音と共にシンクレアの背中は勢いよく地面を叩いた。
馬乗りになったクロードは、双剣の一本『空』をシンクレアの首筋に突きつける。
「終わりだ」
クロードの鋭い言葉に、シンクレアの体がビクッと震えた。
「私・・・・・・負けたの」
そう呟いた少女の顔は、悔しさで歪んでいた。
この炎属性魔法使いが見せた先程の脅威的な反応速度とボスと戦っていた高位魔法スキルから判断するに、クロードは一つの結論に達していた。

それは、この炎属性魔法使いは、攻撃魔法スキルと体術及び、自己支援系統のスキルにしかスキルポイントを割り振っていない、ということだ。
つまり、それ以外の例えば防御系統のスキルは、全く持っていないということとなる。
魔法職は、元々パーティ向けのキャラだが、ソロプレイが無理なわけではない。
しかし、それにはソロプレイに適したスキル振りをしなくてはならない。
ステータス面の防御力の低さから、防御魔法スキルは捨てて、加速系の支援スキルを重点的に取ることにより、回避力を向上させて、魔法職のネックとなる詠唱及び魔法陣の展開にかかる時間を稼ぐというヒット&アウェイのプレイスタイル。
目の前の少女が典型的なソレだ。
シンクレアのライフは、まだ5割を切っていないが防御力の低さ、クロードの攻撃力、首というweak point（弱点）を考えれば、彼女に最早（もはや）逆転の道はなかった。
後は、この『空』をゆっくりと横に引くだけで、彼女のライフは無くなるのだ。
それが理解（わか）っているのだろう彼女も無駄な抵抗はしなかった。
「あーあ、なんかあっさり負けちゃったわね。こんな、あっさり・・・・・私ってばかなり強いし、いつか消えるときは、PKK（PKキラー）に囲まれたり、称号持ちに負けたりするのかなって思ってたけど、まさかアンタみたいな無名にやられちゃうなんて思ってもみなかったわ・・・・・・」
レッドネームにとって敗北はすなわち、消滅を意味する。
シンクレアの体が小刻みに震えているのにクロードは気づいた。
「怖いのか・・・・・・？」
「そりゃあね、いくらゲームだって私が死ぬことに代わりはないし、レッドネームだし、実際シンクレアはここで死ぬのよ、たかがゲー

ムだって割り切れると思う？」
「はぁ、そんなびびんならＰＫなんてやめときゃいいのに・・・・・・」
「何よ文句あんのッ！？私だって最初は――――っ！」
そこでシンクレアは、ハッ、と開きかけた口を閉じた。
「こんな事、言い合ったって無意味だわ、さっさとトドメ刺しなさいよ」
そう言ったシンクレアは、冷めたように無表情になった。先程の振るえも、もうない。
正直、クロードはシンクレアをＰＫする気はなかった。
しかし、俺は君をＰＫしないと言ったとしても、はいそうですか、で済むとも思えない。
目の前のＰＣ（プレイヤーキャラクター）はレッドネームなのだ。
彼女は彼女なりの理由でＰＫをしているのだろうし、レッドネームとしての矜持（きょうじ）があるだろう。
一年前なら、そんなことは気にしなかった。
（どこか、上手い落としどころがないものか・・・・・・）
そこでクロードはある考えを思いついた。
「なぁ、お前、俺のパートナーになってくれないか？」
「は？」
シンクレアが何を言ってるのか理解出来ないといった様子でクロードを見返す。
「パ、パパパ、パートナー！？いきなり、何言ってんのアンタ、頭おかしいんじゃないの！？」
何を思ったのか、カァッとシンクレアの顔が真っ赤になる。
「実は、俺は最近ＷＥＯに復帰してきたばかりでさ、大型アップデートとかきてたみたいだし、昔と色々変わっちゃったところとかあるだろ？そこんとこ詳しく教えて欲しいっていうか、一緒に狩りとかして欲しいってところかな」
「そ、そういうことなら、最初からそう言いなさいよ！紛らわしい

のよ、アンタの言い方」
（何かおかしなことを言っただろうか・・・・・・）
クロードは、首をかしげた。
「というか、それって私に拒否権があるわけ？」
確かに、客観的に見れば、クロードはシンクレアに剣を突きつけているわけで・・・・・・。
「そうだな、これは取引だ」
「取引？」
「そう取引、俺はお前をＰＫのしない代わりに、お前は俺に付き合ってくれ」
「つ、つつ、付き合うって何言ってんのバカァ！アンタなんかと私じゃ釣り合うわけないでしょッ現実見なさいよっ爆死させるわよ！」
（現実って・・・・・・ここは仮想（バーチャル）だけどな、しかし、キツイこというなぁ・・・・・・）
ここまで言われたのは、初めてだ。しかも、初対面の相手に・・・・・・。
少し強引かもしれないが、仕方ない。
「いいのか？ここで俺の提案を蹴るってことは―――」
そう言って剣を少し首に触れさせる。
「理解（わか）るだろ？」
「最ッ低ーよアンタ」
めちゃくちゃ睨みつけられてるけど、ここで引くわけにはいかない。
「レッドネームに言われたくないな」
長い沈黙の後、彼女は静かに頷いた。
「・・・・・・・・・・・・仕方ないわね」
しぶしぶといった感じだけど、今はこれでいい。
「俺はクロード、これからよろしく頼むよ」
双剣の装備を解除し、クロードは地面に押し付けていたシンクレアに手を差し出した。
「・・・・・・シンクレア」

素っ気無い挨拶にクロードは苦笑した。
シンクレアは、クロードの手を掴み立ち上がる。
「す、少しだけなら別に・・・・・付き合ってあげなくもないわ、感謝しなさいよね！」
そう言ったシンクレアの真っ赤な顔を見てクロードは、また小さく苦笑した。

取引《ｄｅａｌｉｎｇｓ》（後書き）

どうも、たちまるです。
少し更新が遅れて申し訳ありません。

友達《ｐａｒｔｎｅｒ》

「そ、それで・・・・・・パートナーって何をすればいいわけ？」
クロード達は、ダンジョンから交易都市カリウェルへと戻っていた。
体力回復も兼ねて、今はファーブという喫茶店にきている。
回復ポーションというのも、もちろんあるが、値が張るので緊急時以外は基本的には使わない。
ファーブの店内は、薄暗くアンティークな家具類が置いてあり、シックな雰囲気を醸(かも)し出している。
厚みのある木材で作られた丸テーブルを挟んでクロードはテケロッティを、シンクレアは普通の紅茶を飲んでいた。
「まぁ、そんなに難しく考えることもないだろ、狩りとか一緒にしてくれればいいよ」
クロードは、そう言ってテケロッティを一口飲む。そして、吹き出しそうになるのを堪えた。
（なんだこれ！？コーヒーとコーラとリンゴジュースを混ぜたような味がするぞ・・・・・・）
当店オススメと書かれたメニューを見て、何も考えずに頼んだ結果だった。説明書きを読んだところテケテケというモンスターからとれる体液で作られているらしい。
「どうしたの、なんか顔色悪いけど・・・・・・」
シンクレアが心配そうに顔を覗いてくる。長いまつげと綺麗な金色の瞳が揺れるのを見て、心臓の鼓動が少し早まるのを感じた。
いくらゲームとはいえ、本物とほぼ同じにしか見えないほどのリアルさで、これだけの美少女がいれば、仕方のないことだと言える。
「いや、大丈夫だ問題ない・・・・・・」
正直なところ目の前のゲテモノジュースをどこかへ捨ててしまいたいところだが、体力の回復量は文句なしで良いので、我慢する。
「俺は、インしてる時は大抵用事があるから、シンクレアは別にい

つもと同じようにしていてくれればいいんだ」
用事というのは、もちろんシエラを探すことだ。
クロードにとってはそれが第一の目標で最優先事項なのだ。
シンクレアと一緒に狩りをしたりダンジョンを巡るのも、きっと楽しいだろう。しかし、今は無理だ。
「そんなのパートナーでもなんでもないじゃないッ！大体用事って何よ！？私より優先すべき用事があるってわけ？」
突然立ち上がり、声を上げるシンクレアにクロードは驚いた。
「お、おい、まてまて！お前は、俺とパートナーやるの反対だったんじゃないのか？」
店内に訪れる一瞬の沈黙。他の客の視線は全てシンクレアへと注がれていた。
「なにあれ」「痴話喧嘩じゃない？」「うっそー」「こんなところで、うるせぇ奴らだな」「リア充爆発しろッ」「はー俺も彼女欲しいなぁ」「直結乙」
周りの声がシンクレアの耳にも届いたのだろう、みるみる内に顔が真っ赤になっていく。
「・・・・・・〜〜〜ッ！」
ストン、とそのまま席について紅茶が入ったアンティークなカップに口をつけ誤魔化すシンクレア。
（なんか、可愛いなこいつ・・・・・・）
先程まで戦っていた相手と同一人物とは思えず、クロードは少し可笑しかった。
「それにしても、どうしたんだ？俺、そんなに変なこと言ったか？」
シンクレアは、俯いたまま答えない。
しばらくして、微かにシンクレアの唇が開いた。
「・・・・・・・・・・・・・・・・WEOで友達って出来たの初めてなのよ」
「え？」
あまりにも小さく呟かれた言葉は、クロードの耳まで届かず空中で

霧散した。
「なんだって？すまん、聞こえなかった。もう一度言ってくれないか？」
「うっさい、バカ。二度と言うか」
（一体どうしたっていうんだ・・・・・・）
クロードは、首を捻って考えを巡らしてみるものの、よくわからなかった。
思案顔でテケロッティを口に含む。また、吹き出しそうになった。
（二度と頼まねーぞこんなもん・・・・・・）
「と・に・か・く、私とアンタは対等のパートナーなんでしょ、自分が言ったことには責任待ちなさいよ、インしたら必ず私に個人チャットでもメールでも送ること！黙って一人で行動してたらＰＫするから」
「それって、パートナーの領分を越えているような気が・・・・・・」
「文句、あんの？」
ニッコリと微笑むシンクレア、傍から見れば虜にされそうな可愛らしさがあるが、クロードにとっては鬼のソレに見えるような気迫があった。
「いいえ・・・・・・」
（笑顔が怖いと思ったのは初めてだ・・・・・・）
クロードは、これからどうしようかと頭を抱えた。

友達《ｐａｒｔｎｅｒ》（後書き）

どうも、たちまるです。
思いつきでゆっくりに小説を読ませたところ、なかなか面白いことに気づきました。
ゆっくりにもっと種類があったらシンクレアの声を可愛くしたいんですがね・・・・・。

接触《ｃｏｎｔａｃｔ》

頭を悩ませていたクロードのテケロッティが無くなった頃、ファーブのドアが開き、新しい客が入ってきた。
何気なくクロードは視線をその客へと移す。
真っ先に目に入ったのは、ウェーブがかかったプラチナブロンドの美しい髪。薄暗い店内の中でも、まるで光輝くような存在感を放っている。
端整な容貌と身に付けている装飾過多なドレスが相まって、クロードのような人間には少し近寄りがたい雰囲気がある。どこかの貴族の令嬢だと言われても信じてしまいそうだ。
ファーブの店員が、その女の子と何やら話を始めた。
（そういえば、この店はプレイヤーが運営しているんだな・・・・・・）
ＷＥＯの世界で運営されている店には、二種類ある。
ＮＰＣが運営している店と実際のプレイヤーが運営している店だ。
ファーブは後者で、プレイヤーが運営している店だった。
プレイヤーが店を開く利点は二つある。
一つは、ＷＥＯで通貨として使われているゴールドを稼げること。
そして、もう一つはＳＰ（スキルポイント）を得ることが出来るという点だ。
厳密に言えば、ＷＥＯの世界に経験値というのは存在しない。そして、レベルも存在していない。
様々なスキルを覚える為には、ＳＰ（スキルポイント）と呼ばれるものが必要になる。
俗に言う、スキル制という奴だ。
クロードは、このシステムを気に入っていた。
従来のレベル制とは違い、スキル制は遥かに自由度が高いからだ。
狩りをしてＳＰ（スキルポイント）を集めるもよし、ファーブのように店を開いて業績を上げることでＳＰ（スキルポイント）を稼ぐのもよし、他にも様々な方法でＳＰを稼ぐことが出来る。

戦闘以外の方法で自身のキャラクターを強化する方法があるおかげで、ＷＥＯでは今までのゲームとは一線を画した自由度を提供することに成功している。
更にスキル制は、戦闘にも多大な影響を与えている。
まず、レベルが存在しないことで、高レベルプレイヤーに低レベルプレイヤーが一方的に狩られるということがない。
もちろん、ＳＰを多く取得しているプレイヤーの方が戦闘に置いて有利であることには変わらないが、ＷＥＯで勝敗を分ける一番の要因は、スキルをいかに上手く使いこなせるか、である。
職やクラスによって、最初の方から使える基本的なスキルから、様々な前提スキルを取得することによって使えるようになる上級スキルなど多種多様なスキルがあるが、基本スキルでも使いこなせればそれは十分戦力になり得るし、上級のスキルでも使いこなせなければ大した戦力にはならないこともある。
つまるところ自身のＰＳ（プレイヤースキル）が、大きく戦局を左右するということだ。
ＷＥＯが大人気であるのは、何もＲＶＭ（マスク）を使った最新型のオンラインゲームだからというだけではなく、こういった細かいところまで作りこまれているからだとクロードは思っている。

いつの間にかシンクレアがしかめっつらでこちらを睨みつけているのにクロードは気づいた。
（ん？俺を睨んでいるんじゃないな・・・・・）
よく見ると、シンクレアが見ているのはクロードの後方、そこでは先程入ってきたプラチナブロンドの客がいた。
どうやら空いている席を探して移動していたらしく、クロードからは死角になっていて気づかなかった。
この時間帯は、狩りやダンジョン攻略から帰還してきたプレイヤーが多いため、店内は結構混んでいる。
プラチナブロンドの女の子はキョロキョロと辺りを見回していたが、

何かを見つけたのだろう、一直線に歩き始めた。
そして――
「相席してもよろしいかしら？」
目の前に来た。
クロードは驚いたが、元々このテーブルは４人相席出来るし別段断る理由も無かった。
いいよ、と応える為に口を開きかけて――
「他のとこ行きなさいよ」
シンクレアが先に応えていた。
（おいおい、感じ悪すぎだろ・・・・・・）
「あら、誰かと思えばシンクレアじゃない、影が薄すぎて気づかなかったわ」
プラチナブロンドの少女は、まるで今気づいたと言わんばかりに目を丸くして見せる。
（絶対、演技だなこれ・・・・・・）
クロードの後方から来たのだから、シンクレアが視界に入っていないことは、まずありえない。
名前を知ってるってことは、もしかして――
シンクレアの小さめの額に青筋が浮かぶのが見えた。
「クロエ、アンタ喧嘩売ってんの？買うわよ、表出なさいよ、爆死させてあげるから」
「もしかしなくても、お知り合いでしたか・・・・・」
クロードは、静かにため息をついた。とても、仲が良さそうには見えない。
「はじめまして、クロエですわ、以後お見知りおきを」
シンクレアを華麗に無視してドレスの端を持ち上げて一礼するクロエ。
「クロードです、よろしく」
挨拶を交わすとクロエは、クロードの隣の席に腰を落ち着けた。
「何しれっと座ってんのよ」

「あら、貴女(あなた)の許可が必要なのかしら、隣の方は迷惑そうじゃありませんけど」
「まぁいいけどさ」
ここで悪いと言えるほどクロードは、心が狭いつもりはない。
睨みつけてくるシンクレアの視線が怖いが・・・・・・。
「クロード、アンタ私を裏切るつもり？」
「いや、まて落ち着けよ、この程度の事が裏切り行為に値(あたい)するというのか？」
「判決、有罪！」
「判決早いよ！？せめて弁護士を呼んでくれ！」
クロードとシンクレアのやり取りを見たクロエがクスクスと笑う。
「何がおかしいわけ？」
「いえ、シンクレアが他の方と一緒にいるなんて珍しいなと思いまして」
「フンッ私はこいつに迫られて仕方なく付き合ってあげているだけよ」
そう言ってシンクレアは、そっぽを向いてしまう。
「ふーん、ああ言ってますけど本当のところは？」
「いや、本当だよ俺からパートナーになって欲しいって頼んだんだ」
とはいえ、シンクレアが言った仕方なく付き合ってるというところには、釈然としないものを感じる。
「意外ですわね、あのシンクレアがパートナーなんて了承するなんて、どんな方法で篭絡(ろうらく)したんですの？」
「これといって、特別なことはしてないが・・・・・・」
まさか、首に剣を突きつけて脅したと言えるはずもなく、クロードはお茶を濁した。
というか、篭絡ってなんだ篭絡って・・・・・・。
「その話は、もういいでしょ！そんなことよりクロエ、何か私に話があるんじゃないの、そうじゃなきゃアンタがわざわざ私が居るところに来るとは思えないし」

「ご明察ですわ、実は今度１ｏｎ１の大会があるんですの、良かったら貴女(あなた)も出ないかしら？」

接触《ｃｏｎｔａｃｔ》（後書き）

どうも、たちまるです。

以下、小説に関係のない後書き。

ＦＥＺ（ファンタジーアースゼロというオンラインゲーム）でアニバーサリールーレットが出ましたね。
でも、正直今回はあまりいいものがないような・・・・・・。
友人の反応もかなり微妙でした。
でも、回しちゃうんでしょうね～

大会《ｔｏｕｒｎａｍｅｎｔ》

１ｏｎ１というのは、一対一つまりタイマンで戦うことを指す。
ＷＥＯで、最も基本となる戦闘形式だ。
クロード自身、対人戦で一番経験を積んでいるのは１ｏｎ１である。
１ｏｎ１で対人戦の個人レベルでの対処の仕方を学び、基礎が完成したら２ｏｎ２や３ｏｎ３などで連携を極めて、後に大規模なギルド戦や領土戦に参加する。というのが、ＷＥＯ（ワールド・エンド・オンライン）では、主流となっている。
クロードは、ちらりと対面のシンクレアに視線を向ける。
一応、シンクレアとの戦いに勝利したクロードだが、何もあれがシンクレアの全力であると思っているわけではない。
シンクレアは、元々魔法使（ウィザード）いクラスであるため、１ｏｎ１の戦いに向いているとは言えない。
本領を発揮するのは、やはり２ｏｎ２以上での戦闘。つまり仲間がいて初めて全力を出せる環境が整う職だということだ。
それでも、クロードをあれだけ追い詰めるだけの実力をシンクレアは持っている。
そしてなにより――――
シンクレアは、あの戦いで《トリプルキャスト》を使っていない。
それは、クロードが細心の注意を払って《トリプルキャスト》を使われないように、いつでも攻撃を入れれるような立ち位置を維持していたからであるが、それでも相打ち覚悟で《トリプルキャスト》ないしは、《ダブルキャスト》を使われていたら、どうなっていたか分からない。
「興味ないわ、１ｏｎ１なんて」
シンクレアの返事は、たぶん思考時間３秒も無かっただろう。
予想通りだったのだろう、クロエがハァとため息をつくのが聞こえた。

「もしかして、私に負けるのが怖いのですか」
「ハァ！？馬鹿言ってんじゃないわよ、誰が誰に負けるって？」
「貴女が私にですわ、ごめんなさい言葉足らずで、爆死爆死と叫んでいるどこかの脳筋娘にも分かるように、ちゃんと言わなければいけなかったですわね。私ったらああ、申し訳なさでいっぱいですわ」
「くっ・・・・・・この、言わせておけば・・・・・・上等じゃない！出てやるわよ！アンタみたいなひらひら舞うしか能の無い剣舞士（ブレイドダンサー）なんて一発で片付けてやるわ」
（シンクレア・・・・・・単純な奴・・・・・・）
剣舞士（ブレイドダンサー）と言えば、ＷＥＯでも人気上位に入る職の一つだ。
回避と連続攻撃スキルが特徴の攻撃職（アタッカー）であり、華麗な戦闘スタイルが人気の理由だろう。
クロエが腰に佩（は）いている二振りの剣を見た限りでは、どちらもかなりの業物であることがわかる。
シンクレアは、ああ言っているがクロエ自身も相当の腕の持ち主だろう。
（どっちにしろ俺には関係のないことだな）
この事に関してクロードとしては、関わるつもりは無かった。
大会に出る暇があるならシエラに関する情報をもっと集めなければならないというのが理由だけではない。
「まぁ頑張ってくれよシンクレア、応援はしといてやるから。それと俺特性の回復ポーションをプレゼントしよう」
「何言ってんのクロード？アンタも出るに決まってんでしょ！どうして私が出てパートナーであるアンタが出ないのよ？もうこれは当然の如くアンタも大会出場が決まってるのよ」
「いや、あの俺は用事があるから・・・・・・」
「ないから」
シンクレアの強い口調に思わず怯みそうになるクロードだが、今回ばかりは譲れないものがあった。
「俺は大会には出ない。用事があるってのも、もちろん理由の一つ

だ。だけど、それだけじゃない。俺は大会にはもう出ないって決めてるんだ」
クロードの断固とした拒絶にシンクレアは沈黙する。
「・・・・・・何か私を納得させるだけの理由があるんでしょうね」
「理由なら、ある。だけど――――――」
クロードにとってそれは辛い記憶を蘇らせるものだ。思い出は廃れて風化し幸福だった時間はあっという間に過去の遺物となってしまった。それでも、未だに心に残り続けているものがある。
幸福は時を経ると共に、痛みと苦しみをもたらしクロードを縛り続けていた。
「わかったわよ、理由なんてどうでもいいわ。アンタは大会に出ない私は大会に出る、別にそれだけの事だし、ここでグチグチ言ってパートナーとしての品格を問われるのも癪だし、今回だけは見逃してあげる。ただし、次は絶対に付き合ってもらうからクロードもそのつもりでいなさいよね！」
意外そうな顔をするクロードからプイッとシンクレアは顔を逸らした。
「ハーイ、それではシンクレアは出場ですわね。わたくしとしては、クロードさんにも出場していただきたかったのですが、しょうがありませんわね。潰し甲斐があるのが一匹出てくれるだけでも今日は良しとしておきますわ」
「はんっその憎まれ口も大会で二度と叩けないようにしてあげるから。首を洗っときなさいよクロエ」
「うふふっ期待しておりますわ。せいぜい私と対戦する前に敗退しないでくださいねシンクレア」
シンクレアとクロエの間にバチバチと火花が散る。
「それでは、私はこれでお暇させていただきますわ。クロードさんも是非見学にいらしてくださいませ」
クロエはそう言って席を立ち優雅にドレスのような防具の裾を持ち上げて一礼した。

「気が向いたらな」
クロードの気の無い返事に、クロエは微笑を浮かべ店内から去っていった。

大会《ｔｏｕｒｎａｍｅｎｔ》（後書き）

どうね、たちまるです。
忙しいです・・・・・。

形骸《remains》

用事があるので落ちる。
そう言ってログアウトしたシンクレアと別れたクロードは、薄汚い路地裏に入り込んでいた。
あちこちに何の用途で使用されるのか分からない半ばモザイクがかかった様な物体が散乱していて、ふっとよぎる腐臭が辛い。
長い時間滞在し続ければ、精神そのものが汚染されるような錯覚に囚われるような暗鬱とした光景が延々と広がっている。
クロードが訪れたのは、空中都市（レライエ）だった。
空中都市（レライエ）は、その名の通りクリスタルの力によって空中に浮遊している。
浮遊していると言ってもただフワフワと浮いているだけではなく、それなりの速度で絶えず移動しているため、飛空挺を使ってもここに訪れるのには時間がかかる。
そのため、クロードがいつも使っているのは《レライエ》へと直行する特殊なワープゲートだった。
所謂（いわゆる）隠しワープゲートと呼ばれているそれを使いクロードは、空中都市へと訪れた。
そして、今は《レライエ》の都市部からはずれ今や廃墟となった路地裏に居る。
「確か・・・・・・ここら辺だったと思うが・・・・・・」
クロードは、一年前の記憶を頼りに路地裏を進んでいた。間違っていなければ、目的の場所は近い。
昔はこれほど荒れ果てた場所ではなかったように思う。実際、クロードが通ってきた道を一年前と照らし合わせて辿れば、驚くほど退廃しているようだった。
何かの死体や汚物がそこら中に転がり、かろうじて保っていた路地裏としての体裁すら奥に行くほど霞んでしまうような混沌に包まれ

ている。
１０分ほど彷徨(さまよ)いクロードは、そこへたどり着いた。
グラ二サイド鉱と呼ばれる《レライエ》でしか採掘することの出来ない特殊な金属で製造された厚さ５０ｃｍもある頑強な扉が建て付けられた一軒の古びた家屋。
年季の入った外壁にすっかり剥がれ落ちた塗装や染みなどが張り付き一見すればただの廃屋と思い込んでしまいそうな雰囲気を放っている。
クロードを扉に手を伸ばすとタンッタタタンッタンッと素早くノックをした。
この家屋に入るために必要な、昔からのルールに則った方法の一つがこれだ。
同じ動作を二回繰り返し、クロードは扉から身を離し、しばし聞き耳をたてた。
「入れ」
中から聞こえてきたのは、男性とも女性とも取れる中性的な催促だった。
クロードは、中から聞こえた声に従いゆっくりと扉を開けて中へ身を滑り込ませた。
部屋の中は漆黒に塗りつぶされていた。
照明は無く、窓も無い。例え目が暗闇に慣れてきたとしてもよほどの至近距離で無ければ相手の顔さえ判別できないだろう深く塗りつぶされた闇が広がっている。
「お前、クロードか久しぶりだな」
そう言ったのは、クロードが引退する前から付き合いがあったプレイヤーＯＺだ。
暗闇に閉ざされているこの部屋では相手がどこにいるか判断することは不可能だが、声だけでクロードは相手を判別することが出来た。
クロードはまるで一年前に戻ったかのような、錯覚を覚えた。
「相変わらずお前はじめじめとしたところが好きみたいだな」

「職業柄だよ、仕方ないだろ。情報は武器となり力となる。私自身の情報がいついかなる時に悪用されるか分かったもんじゃない」
ＯＺの職業というのは、情報屋である。
最初に聞いた時は、そんな職業があるのかと疑問に思ったこともあったが、ＯＺと長いこと付き合っていくごとにそんな疑問は解消されていた。
ＯＺに何か調べ物を頼めば、ほぼ数日でそれらを調べ上げて報告してくる。
当然、それに見合うだけの報酬を要求されるがＯＺの仕事は高額の報酬に見合うだけの結果を伴う。
報酬はそれなりに高いが、優秀な情報屋というのがクロードのＯＺに対する評価だった。
「まったく・・・・・・お前は一年経っても全然変わってないな・・・・・」
「それはお互い様ってもんだろうよ、クロード」
なんとなくだが、クロードはＯＺが苦笑を浮かべているように感じた。
もちろん闇の向こうにいるはずのＯＺの姿はクロードには見えていないし、そもそもクロードはＯＺがどんな姿をしているのかを知らない。
いつもフードを被っているＯＺは素肌を少しも外に晒さず、顔には奇妙な仮面をつけていて性別すらも不明だった。
平常であれば、思わずＰＫの類であるかと疑心暗鬼に駆られてしまいそうな、その容貌すらＯＺならばと納得させられるような奇抜な雰囲気をＯＺは持っている。
「お前が引退したって聞いた時は驚いたが、まぁ当然の結果だと思っていたよ。あの頃のお前にとっちゃシエラが全てだって分かっていたからな」
「そんな、風に見えていたか？」
「隠しているつもりだったのか？」

逆に質問を返されてクロードは黙ってしまった。
クロードとしては、別段そんなつもりは無かったが・・・・・当時を思い返せばいつもシエラの近くにいたような気もする。
それもこれもクロードをＷＥＯに誘ったのはシエラであり、ＷＥＯでの生き方を教示したのもシエラだったからだ、と言えば済む話ではあるがクロード自身、自分がそれだけの理由でシエラと共にＷＥＯに居たのではないと理解していた。果たして自分がどんな気持ちでシエラと接していたのか、今ではもう思い出せない。
もう一つ、確定的な理由はあったが、果たしてそれだけが全てだっただろうか。
真剣に悩むクロードが見えているのかいないのか、クックックッとＯＺは声を上げて笑った。
「まぁいいさ、今日は懐かしい旧友に会えて私は機嫌がいい。シエラに関する情報を集めておいてやるよ、二、三日したらまた来い。それまでに少しは手がかりを掴んでおいてやる」
「お前・・・・・・」
ＯＺと会ったのは一年前が最後だ。当然それまでにクロードから連絡を入れたことも無ければＯＺから連絡が来たことも無かった。
復帰して間もない自分の状況を既に把握している様子のＯＺに改めてクロードは、ＯＺという人物の底知れぬ力を実感した。
そして、その力はクロードことリアルの神谷暮都にまで及んでいることは想像に難くなかった。
「おいおい、短い付き合いじゃないんだ。お前が何を考えて何を欲しているのか、なんて私に分からないはずがないだろう。それとも何かシエラ以外のことで何か私に調べて欲しいものでもあったか？」
全てを悟っているだろうＯＺはそれでも、リアルの話はおくびにも出さずに接してくれる。
思えばそんなところをクロードは気に入ったのかもしれなかった。
「いや、お前の予想は当たっている・・・・・・」
「だろう？」

降参とばかりにクロードは両手を挙げる。
「お前には昔から敵(かな)わないよ」
「ハッ私だってお前には敵わないと思っているさ、一年前の・・・・・・お前が引退する直前に出た大星争祭を覚えているか？」
「ああ・・・・・そんな大会に出たこともあったな」
クロードにとって忘れられるはずもない出来事だった。
隣にシエラがいない、そんな絶望感と孤独に耐え切れず、せめて残された最後の残滓(ざんし)だけは、無くしてしまわないようにと出場した最後の戦祭だ。
「あの時のお前は凄かった。正に鮮血の死神(グリム・リーパー)の称号に違わぬ鮮烈な戦いぶりだった。お前は知らないだろうが、あの大会の動画は、色んな動画サイトに配信されててな。最強の錬装士(マルチウェポン)といえば、鮮血の死神(グリム・リーパー)だと有名になっている」
「よせ、あの大会のことは思い出したくない」
「シエラとの約束だったからか？」
「・・・・・・」
「ハッ分かったよ、用事は終わったろ。さっさと帰りな。いつまでもここにいられちゃ迷惑だ」
「おっとそうだ、忘れてた」
扉を半ば開いたところで、クロードは後ろからのＯＺの声に立ち止った。
「最近、黒い影を見たっていう噂を聞いてな。なんとも、そいつに襲われると意識不明になっちまうとか言われてるらしい。くだらない噂だが、万が一ということもある。お前もせいぜい気をつけるといい」

†

「ク・・・・・・に・・・・・・・・げ・・・・・・・・クロ！・・・・・・・・
――――――ッ！！」
何もかもが紫色の水晶に囲まれた天空の塔の最上階。
クロードの体は目視することの出来ない得体の知れない何かによって動きを封じられていた。
まるで鋭利な剣に切り裂かれたかのように斜めに奔る巨大な亀裂から伸びる一本の宝剣。
誰もが目を心を奪われるような、その宝剣の輝きはどす黒い血に覆われて、まるで生き物が明滅するかのように瞬きクロードを映し出していた。
宝剣は一人の少女を背中から貫き、その刀身の切っ先を胸から生やしていた。
何が起こったのか。
目の前の光景に、絶望感に声は掠れ瞳孔は開き、心臓は張り裂けそうな収縮を繰り返し、クロードは必死になって手に足に力を込める。
それでも、不可解な力に封じられた自らの体はまるで自分のものでなくなったように、反応を無くしていた。
目の前で、少女の・・・・・シエラの命が刻一刻と溢れ出て、今にもその華奢な体は崩れ落ちそうで、クロードはただそれを見ていることしかできない。
「・・・・・・く・・・・・・・・・・・・・くれ・・・・と・・・・・・・」
もう既に声を出すのすら生命を削る行為であるというのに、彼女はクロードの名を呼び続ける。
もうしゃべるな！もうしゃべらないでくれっ！
そう叫んだはずの口は、虚しくパクパクと開閉を繰り返しただけで、言葉にならない。
そんな無力なクロードを見つめるシエラは、どこまでも透明な瞳で慈愛に満ちた表情を浮かべていた。
（そんな、そんな顔をしないでくれ・・・・・・）

そして、宝剣を生み出していた亀裂が広がり――

「うわぁああああああああああああああああああああああああああ
ああ」

神谷暮都は悪夢から目覚めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4590y/

WEO《ワールド・エンド・オンライン》

2011年12月28日00時54分発行